注記：本論考は個人の見解であり、日本国際問題研究所の見解を代表するものではありません。

# 変動期の日本の政治外交を巡って
## ～戦前と戦後

**武田知己**
（大東文化大学）

戦前の国家形成期と戦後の国家形成期とを比較する際に（それが本研究会の目的であるが）、二つの大きな変動期の間に存在する時期や事象はどのように位置づけられ、どのような意味を持つのか。それは単に安定期なのか、あるいはより小さい変動期に過ぎないのか。

本報告は、大正期（日露戦後）から昭和戦後後期（高度成長後）までを視野に、二つの座談会（佐藤誠三郎・中村隆英・伊藤隆「昭和史を考えるヒント」と高坂正堯・小松左京・秦郁彦「昭和期のもしも」いずれも『諸君』1976 年 7 月号所収）と論考（渡辺昭夫「日本外交の伝統と戦後」『歴史と人物』1973 年 12 月号）を主たる題材に考える事を目的とする。

ところで、この三つの題材を選んだのは、体験的に戦前を知り、戦争を知り、高度成長を知る世代（1930 年代前半生まれ）の歴史家が、段階説（大正デモクラシー→昭和ファシズム→戦後民主主義）も革命説（戦前戦後断絶説）も取らず、何故に以下のように考えたのかを検討するためである（なお、以下の発言はいずれも佐藤誠三郎のものだがある種の共通理解であったように思われる）。すなわち、

・「いわゆる大正デモクラシーと、いわゆる昭和ファシズムが截然と分かれるわけでもないし、また戦後民主主義と言われるものが、戦争中の社会と、まったく断絶しているわけでもない」
・「むしろ 1955 年以降の高度経済成長の方が、ある意味では敗戦の断絶よりも、更に大きな変化をもたらした」
・「その上、1970 年代初頭に、またもう一度大きな変化が起こっている。現在生じつつある変化は近代 100 年をひとまとめにして区切るくらいの大きな変化になるのではないか」

本報告は、とりあえずの結論として、三つの題材から、以下のような近現代理解を抽出する。

・「欧米先進国に追いつくための発展」というコンセンサスがあった明治が終わると、その「近代コンセンサス」というべきものはしばしば揺れ動いてきたが（大正から昭和戦前期にかけての思想的星雲状態はその証拠である）、1955 年体制がそれを再固定化した。つまり、55 年体制は第二の近代コンセンサスを形成したのである。その崩壊が始まったのが 1970 年代であった。つまり、大正期に近代日本のあり方を巡る「組み替え」が始まり、またそれが必要とされ、戦争と敗戦を越えて 1955 年にそれが再固定化されるが、1970 年代に溶解する。1970 年代こそが変動期であるという考え方がここに示されている。
・また、1970 年代には石油ショック、ロッキード事件に加えて、ニクソンショックが起きる。1970 年代の日本は、こうした出来事が示唆する国際変動に対処しなければならない。外交問題を処理する難しさはそれ以前とは比較にならない。比較を探すと、例えば、日本の近代史の中では逸脱と理解されてきた 1930 年代が、適当な対象とされる。日露戦争当時から格段に困難を加えた事態、また日本の決断が国際関係に即座に影響を与える事態に対処しなければならなかった当時の指導者と比較して、明治の指導者が「賢明な現実主義者」に見えるのは、対処しなければならない問題がはるかにシンプルであったからともいえる。

つまり、1970 年代は、彼らの目には「近代から現代へ」の本格的な転換期であると見え、それ以前は「近代コンセンサスを巡る一塊の時代」であったことになる。そして、1930 年代の日本の試み――国内的には議会制民主主義の刷新の試みと国外的には新秩序構築の試み――は、1970 年代の日本が（負の教訓になるかどうかはさておき）参照するべき事例となりえるとされたのである。

さらに、このような指摘は 21 世紀において、この時代を含めて改めて近現代日本を振り返ろうとする私たちに、以下のような示唆を与えるのではないだろうか。

・段階や革命を意識するマルクス主義的な歴史理解に対し、皇国史観に代表される右派的な歴史理解を対峙させるのでなく、より歴史内在的な近現代日本理解は如何にして可能か。ここにその一例があるとは言えないか。
・通説として存在している戦前と戦後の断絶を強調しない理解は可能であろうか。また、もう一つの戦前と戦後である「冷戦」の前後をどうとらえるか。
・また、新しい戦争が始まったともいえる現在をどうとらえるか。

就中、報告者が意識しているのは、国際政治の緊迫は幾度か経験してきた日本であるが、相対的に衰退している自分を、21 世紀において初めて経験していることである。2010 年に経済規模で中国に追い越された日本は、すぐに他のアジア諸国に並ばれ、追い越されるだろう。こうした視点から、近代はそして 1970 年代は、どのように見えるだろうか。報告を通じて考えてみたい。